

## モデルプログラム D-3 文化適応—事例から学ぶ文化的多様性—

ねらい	外国人児童生徒等が文化的差異により直面する困難を、当事者意識をもって捉え、学校教育現場で多文化共生教育に取り組む事の重要性を理解する。
対象	<input checked="" type="checkbox"/> 教師を目指す学生(教員養成課程他) <input type="checkbox"/> 日本語教育を学ぶ学生 <input checked="" type="checkbox"/> 現職日本語指導担当教員 <input checked="" type="checkbox"/> 現職一般教員 <input type="checkbox"/> 管理職 <input type="checkbox"/> 指導主事 <input checked="" type="checkbox"/> 日本語支援員/母語支援員
日本語指導・外国人児童生徒等教育の経験	<input checked="" type="checkbox"/> 経験なし <input checked="" type="checkbox"/> 1年目 <input type="checkbox"/> 2-4年 <input type="checkbox"/> 5年-9年 <input type="checkbox"/> 10年以上
高めたい資質・能力	<input type="checkbox"/> 捉える力(子どもの実態把握) <input type="checkbox"/> 捉える力(社会的背景の理解) <input type="checkbox"/> 育む力(日本語・教科の力の育成) <input checked="" type="checkbox"/> 育む力(異文化間能力の涵養) <input checked="" type="checkbox"/> つなぐ力(学校作り) <input type="checkbox"/> つなぐ力(地域作り) <input checked="" type="checkbox"/> 変える/変わる力(多文化共生社会の実現) <input type="checkbox"/> 変える/変わる力(教師としての成長)
主な内容	D 文化適応 A 外国人児童生徒等教育の課題
活動形態	<input type="checkbox"/> 講義型 <input checked="" type="checkbox"/> 活動型 <input type="checkbox"/> フィールド型 <input type="checkbox"/> 実習
時間	60分
流れ(・項目)	活動(◇活動の工夫)
1. 課題の把握(30分) ・文化間移動とライフコース(A) ・外国人児童等の文化(D)	1. 文化間移動をする子どもが、来日後に直面する文化的差異による戸惑いや困難を想像する。 1) 来日直後の外国人児童が違いに戸惑うであろうことを付箋に書き出す。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">アンさんはフィリピンから来た小学4年生です。学校文化の違いでどんなことに戸惑うと思いますか。</div> 2) それぞれが想像した事柄を、付箋を示しながら紹介する。 3) 付箋をグループ化し「想像される戸惑い」としてラベルを付ける。
2. 事例研究(45分) ・自文化中心主義(D) ・子どもの文化適応(D)	2. 外国人児童生徒等の事例(エピソード)から、文化適応について知る。 1) グループ内でそれぞれが異なるエピソードを読み他の2人に紹介する。 エピソード例 A 忘れ物(学校に持ってくるもの)が多い B 給食に食べたことがない料理が多く、食べられない C ピアスをつけてくる 2) 各エピソードについて話し合う ・どうして問題が起きるのか(子どもの行動の背景にある文化を理解する) ・解決のためには、何をすればよいのか(自己の文化を捉え直す) ・子どもの年齢が異なる場合、エピソードの事態はどう変化するか
3. 解決方法の検討(15分) ・異文化の受容(D) ・自己肯定感(D) ・校内教職員・支援員の連携(C)	3. 1の「想像される戸惑い」を軽減するために、教師・支援者として、どのような支援・教育をするか話し合う。 ・子どもに直接働きかけることは? ・周囲の子どもたちに働きかけることは? ・教職員が共通理解をしておくべきことは?
備考	・1の児童、2のエピソードは地域や学校で話題になることを例として示す。 ・事前に、子どもの文化適応に関する講義を受けていれば、2を中心に45分程度で実施する。